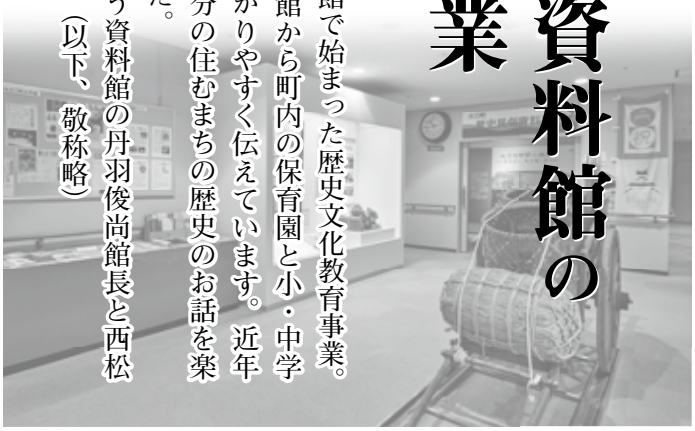
過去の歴史から未来をひもとく

大口町歴史民俗資料館の歴史文化教育事業



平成29年より大口町歴史民俗資料館で始まった歴史文化教育事業。事業の取り組みの一つとして、資料館から町内の保育園と小・中学校へ職員が出向き、郷土の歴史をわかりやすく伝えています。近年はすっかり定着し、子どもたちも自分の住むまちの歴史のお話を楽しみに待ってくれるようになりました。

今回の特集は、出張授業をおこなう資料館の丹羽俊尚館長と西松賢一郎学芸員に、お話を伺いました。（以下、敬称略）

―まずは、大口町歴史民俗資料館の紹介をお願いします。

館長　大口町歴史民俗資料館は、ほほえみプラザ3階にあります。この施設の向かいにある土蔵風の建物とよく間違えられます。ほほえみプラザの建物内にあるのが資料館、向かいの土蔵は収蔵庫。収蔵庫には町民の皆さんから寄贈された貴重な農具や生活用品、史料などを細かく整理分類して保管しています。収蔵庫は普段開放されていませんが、歴史民俗資料館は水曜日から日曜日まで開館（※17ページ「資料館だより」参照）しており、無料でどなたでも見学していただけます。常設展示室と企画展示室とに分かれ、常設展は大口町の古代からの歴史の流れをわかりやすく目で見て体感できるようになっています。企画展は年4回、テーマに沿った展示をおこないます。

町内のお子さんは「施設見学」や「まちたんけん」で一度は訪れたことがあると思いますが、大人の方は存在をご存じないかもしれませんね。ただ今、夏の企画展「卒業証書ができるまで　～「出雲民藝紙」のつくりかた～」が開催されていますので、お気軽に見に来てください。

―資料館の展示のほか、保育園や小・中学校へ出張して大口町の歴史を伝える活動が歴史文化教育事業の一つの柱ですね。この事業が始まったきっかけは何だったのですか？

西松　この事業が始まる前も、学芸員の立場として、地域の皆さんに町の歴史のお話をさせていただく機会をたびたびいただいていました。主に老人クラブなど、現役を引退された60代、70代の地域活動で中心となっている世代の方に「地元の文化遺産について」のお話をすることが多かったです。地元の文化遺産とは、例えば史跡や遺跡、伝承、寺社や石造物など身のまわりにある「古いモノ」ですが、地元の事柄であるにもかかわらず、意外にも「知らなかった」といわれることが多いことを実感しました。現在の60代から70代は現役時代（高度経済成長期）、仕事を猛烈に忙しくこなしてこられた方や引っ越して町内に住まわれた方が多く、口伝えで伝わっていくような伝承や地域文化などに触れる機会がなかったのかもしれません。

▲西松賢一郎学芸員

▲大口町歴史民俗資料館（ほほえみプラザ３階）

▲大口町文化財収蔵庫

その結果、代を重ねるごとに地元の歴史文化から遠ざかっていく傾向がみられるのです。小さな地域の文化や歴史は住民同士の絶え間ない交流によって脈々と受け継がれていくところが大きいので、このままではいつか地域の履歴（歴史）が絶えてしまうと感じました。その流れを少しでもくい止めるため、老若男女問わず、地元の歴史や文化を知っていただくお手伝いができればと始めたのがこの事業です。

―なるほど。確かに、日本の大きな歴史は何年間も学校で習いますが、地域の小さな歴史は小学校の短い期間にほんの少し習って終わるので、大人になるとほとんど覚えていないというのが現実ですね。親や祖父母から聞くことがなければ、いつか消えていってしまうかもしれませんね。

館長　歴史文化教育事業のうち、特に子どもたちに対しては、思考が柔軟で感受性の豊かな時期におこなうことにより、自分の住んでいるまちを好きになって、自分のふるさととして愛着を持てるような願いをこめておこなっています。

―子どもたち相手にお話しするわけですが、興味をもってもらうための工夫はありますか？

西松　発達段階に応じた内容を心掛けているので、相手の年齢で話し方、伝え方を変えています。例えば、保育園児から小学校低学年に向けては、言葉で表すより五感に訴えた方が記憶に残るので、小道具を用意して子供の素直な驚きや感動を誘っています。明治元年に入鹿池の堤防が崩壊したことにより大口町でも多数の死者が出た「入鹿切れ」を説明するときは、実際の波の高さを「３メートル」と言葉で表すよりも、竿とビニールテープを使った小道具を持ち上げて高さを表し、目で見える形にした方が、子どもたちからは「わぁ」という驚きの声が上がります。

▲北保育園で水害の高さを説明

長松寺に、汗をかいて住民に危機を知らせたという伝承のある「汗かき地蔵」がありますが、実際のお地蔵さまは地上約４メートルの高さに鎮座していて正確な大きさを実感することができません。97センチという実寸大の紙を持っていって園児に自分の身長と比べてもらうと、「僕と同じくらいだ！」と笑顔で親近感を持って記憶に残してくれます。

裁断橋（さいだんばし）の擬宝珠（ぎぼし）（大口町出身の堀尾金助（堀尾吉晴の息子）の母の銘文が刻まれている）のお話をするときは、資料館にある実寸大のレプリカを持っていき実際の大きさを目で見てもらいます。必ず、

▲丹羽俊尚館長

令和４年度 歴史文化教育事業 予定

鋳鉄地蔵菩薩立像（長松寺）

裁断橋

白山古墳群・仁所野遺跡

入鹿切れ慰霊碑（六部橋）

白鳥小学校交歓会

獅子狛犬（余野神社）

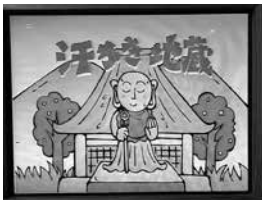
大口中学校	堀尾吉晴のまちづくり	（2年生）
北小学校	まちの古墳・故郷の偉人 堀尾吉晴	（6年生）
	まちのうつりかわり	（5年生）
	おおぐち文化遺産マスターになろう	（4年生）
	航空写真を使ったまちの様子	（3年生）
	むかしのどうぐ	（3年生）
	むかしばなし読み聞かせ	（2年生）
西小学校	故郷の偉人 堀尾吉晴	（6年生）
	ほたるがいた頃の大口町	（5年生）
	むかしのどうぐ	（3年生）
南小学校	故郷の偉人 堀尾吉晴	（6年生）
	ふるさと大口100年のあゆみ	（5年生）
	「裁断橋物語」について	（5年生）
	姉妹校交歓会（白鳥小学校）	（5年生）
	むかしのどうぐ	（3年生）
北保育園	入鹿切れ・六部橋の石碑	（年中・年長）
	小口城	（年中・年長）
西保育園	やまんばものがたり・徳林寺	（年少から年長）
	白山ふれあいの森・仁所野遺跡	（年少から年長）
南保育園	裁断橋ものがたり・堀尾跡公園	（年少から年長）
	あせかき地蔵・長松寺	（年少から年長）

堀尾吉晴公

善光寺塚古墳

小口城址

徳林寺（別名は山姥寺）



読み聞かせ（汗かき地蔵）

読み聞かせ（山姥物語）

「思ったより大きい！」という感想をもらいます。実物は名古屋市博物館にあるので、「ほんものを見に行きたい」というお子さんも必ず何人かいますよ。

小学校高学年になると地図を読みとったり史跡の意味を理解できるので、映像や写真を使って今と昔の違いや移り変わりを見比べて、未来の大口町のことを自分なりに考えてもらったりしています。

館長　西松学芸員のお話は、子どもが「何でかな？」と疑問に思うことを上手に盛り込んで組み立てています。子どもは好奇心が旺盛なので、なんでだろうと思ったことに対してはとことん話の続きを知りたがる。後からわかりやすい解説でその答えが判明すると、「そうだったんだ！」という驚きと感動で記憶に残る。また、自分の住んでいる地元の話というのが、より興味を引いているようです。「あ、そこ（それ）知ってる！」という話が出てくると、集中して聞いてくれるように思います。

西松　工夫といえば、謎解きやゲームの攻略のような、先が知りたく

なるようなタイトルや仕掛けを入れると、ただ歴史話をするより目の輝きが違います。子どもはクイズが大好きなので、4択のクイズをところどころ入れると盛り上がりますよ。

―聞いたところによると、子どもたちは今ではとてもこの授業を楽しみにしていて、授業のある日は家に帰ってからおうちの人に聞いたお話を話すとか。親子でふるさとの話ができるのは素敵なことですね。

館長　家族の会話のきっかけになれば、よりうれしいですね！

―ところで、資料館と、保育園や小学校などの教育機関は、本来は横のつながりのない別の組織ですね。役割や立場の違う機関が連携することをどのようにお考えですか？

館長　このような連携が実現した背景には、ここ20年の間、教員の働き方改革や学校で扱う内容の多様化が進み、外部講師の受け入れが積極的になされるようになってきた事情があります。英語の授業でネイティブの教師（ＡＬＴ）を雇ったり、「総合」で川の生き物やホタルの生態の専門家を招いたり。われわれ資料館が授業のお手伝いをするのもその一環です。

西松　例えば、小学校の「社会科」の時間に、「昔の道具」という単元があります。今では当たり前となった、電気アイロンや炊飯器などの電化製品が各家庭に普及したのは約60年前のこと。それ以前に使われていた道具は若い先生方にとって、使ったことも見たこともないし、場合によっては聞いたこともないというのが現状です。もちろん私もリアルタイムで使ったことはありません（笑）

炭火アイロンや羽釜、かまどなどを資料館にある実物を使って説明しますが、炭の火のつけ方や消し方、かまどで煮炊きする仕組みなどの説明は、やはり実物を見て知っていないと難しい。資料館には町内の皆さんからご寄贈いただいた資料が豊富にそろっていますし、実際に使うことができるものもありますので、出張授業という形で有効にご活用いただき、生きた教材としてお役に立てればうれしいです。

▲昔の道具

館長　もちろん、我々は教員という立場ではないので、あくまで学校の授業の一部分をお手伝いしているに過ぎません。教育の現場では、今後、いろいろな分野で精通している方に入ってもらうことでより専門性を生かした授業を組み立てていく流れが進んでいくと思います。我々もその流れでお手伝いしていきたいと思っています。

取材にて

私たちは、過去を生きた先人たちの、成功や失敗から多くのことを学びます。歴史の中では光と影は常に背中合わせ。歴史を学んだ者ならば、どんな輝かしい栄光にも、影には血のにじむような努力と多くの犠牲が存在したことを知っているし、どんな凄惨な混乱があっても、やがて立ち上がった先人たちのたくましさが存在したことを知っています。歴史を学ぶということは、過去の偉大な知恵や勇気を知り、よりよい未来へ向かって進んでいくヒントを得ることにほかなりません。

「歴史学習をする中で、子どもたちに身に付けてほしいと願うのは、過去を学ぶことによって未来をどう生きていくか考える姿勢です。『未来志向』という言葉がありますが、ただ単純に地元の昔の出来事を点として覚えるだけでなく、線や面でつながっていく現在、そして未来を考える思考力が子どもたちの中に育つといいなと思います」と、丹羽館長。

グローバル化が進む現代、世界のどんな状況も他人事ではなく、私たちは困難を切り抜けるためのあらゆる方法を自分事として模索していく必要があります。答えは地域の数、その時代に生きた人の数だけあるでしょう。歴史にちりばめられた無数のヒントを拾い集めていく姿勢を身に付けることが、今こそ必要なのかもしれません。

次回は、保育園、小学校の実際の現場の様子をお伝えします。

取材・文／大口町 NPO 登録団体 ZOOM